

2014年12月14日 主日礼拝

説教「救い主の誕生」

マタイの福音書1章18-25節

【悩むヨセフ】

マリヤに焦点が当てられているルカの福音書に比べ、マタイの福音書ではヨセフ、それも悩むヨセフがクローズアップして描かれています。ヨセフの悩みは、深く痛々しいもの。婚約中のマリヤが妊娠したのです。当然ヨセフは自分以外の男性との交渉によるものだと考えました。愛する者に裏切られた痛みに、ヨセフは、深く傷ついたので。私たちもみな、ときに言いようのないような痛みの中におかれることがあります。だれにも言うことができないような深い痛みの中におかれることがあるのです。

マリヤをさらしものにしないために内密に離縁することにしたヨセフ。人間の基準から言えば、最善の、最も配慮ある正しい選択をしたといえるのですが、ヨセフの心の痛みが取り去られたわけではありませんでした。なおも、思い巡らしながら眠りについたので。

【主の使いが…】

そんなヨセフに、神さまは主の使いを通して語られました。夢の中ですから、ヨセフは完全に受け身。一方的に神さまがヨセフに語られたのです。神さまの恵みはいつも、一方的。予想もしないときに、予想もしないやり方で与えられます。神さまが、いつも私たちの予想を超えるのは、私たちの考えることよりも、はるかにすばらしいことをしてくださるからで

す。神さまはヨセフに、「ご自分の民をその罪から救ってくださる方」(21)、主イエスの、聖霊による誕生を知らせてくださいました。ヨセフの人生の中で、最も暗い谷間のようなときに、神さまの言葉がのぞんだのでした。

私たちは、祝福されているときは、ああ、神さまがともにいてくださる、とそう思う。でも、困難なときには、神さま、どこにおられるのだろうか、と、そう思うことはないでしょうか。けれども神さまは、わたしたちの人生のもっとも暗い谷間にこそ、入りこんでくださるお方なのです。

【神さまのあわれみの系図】

マタイの1章の系図には暗い谷間のような部分がちよくちよく顔を出します。「ダビデに、ウリヤの妻によってソロモンが生まれ」(6)もそうです。バテシバはウリヤの妻だったのに、ダビデが奪い取りました。これは、恥ずかしいこと、罪深いことです。だから、正しい人ヨセフもダビデに代表される恥と罪の流れの中にいるのです。けれども、人間の罪と恥の系図は、神さまのあわれみの系図でもあります。

ダビデの人生の最も暗い谷間にも、神さまは、入りこまれました。預言者ナタンを遣わして、ダビデを悔い改めさせ、神さまとともに歩く歩みに立ち帰らせたのです。神さまのほうから、そうなさいました。そうしないではいられないから、そうなされたのです。神さまが入りこまれるときに、世界が変わります。私たちの人生も変わるのです。

「その名はインマヌエルと呼ばれる」(23)とありま

す。インマヌエルと呼ばれる主イエスは神さま。私たちの人生の最も暗い谷間に入りこんでくださる神さまです。私たちの恥と悲しみの中に入りこんでそれを喜びに変えてくださるために、十字架に架かってくださった神さま。罪人とみなされて、十字架の上で、恥と苦しみをまとってくださったインマヌエルの神さまなのです。

【悩みから喜びへ】

ヨセフは、マリヤを受け入れました。聖霊によって処女がみごもるといふ不思議なことを、神さまの一方的なあわれみによって受け入れたのです。マタイの系図は、1節に「イエス・キリストの系図」と記します。でも実際は、ヨセフの系図。ヨセフと主イエスの間には、血のつながりはありません。けれども神さまは、「あなたにわたしの子キリストを委ねる。あなたが父となって、養って欲しい」とヨセフに願われ、それを受け入れたことによって、主イエスをヨセフの系図にお加えになったのでした。

こうして、神さまのみこころを受け入れたとき、ヨセフの生涯の最も暗い谷間は、喜びに輝くものとなりました。もう離縁するしかないと思ったマリヤとの関係もまったく新しくなりました。孤独であったヨセフはマリヤと心を通わせたのです。彼らは、神に仕える喜びの家族となりました。それは主イエスがお生まれになるのにまことにふさわしい家族でした。神さまが造り出してくださるものはほんとうに素晴らしいものです。だから私たちが通らなければならない暗い谷間も恐れることはないのです。